

岡山県の北部に位置する津山市。岡山市、倉敷市に次ぎ、岡山県では3番目の人口規模を誇る。

2024年9月、市の中心部である城下地区にお目見えしたのが「城下スクエア」だ。背後にはまちのシンボルである津山城跡の石垣や備中櫓がそびえ、国登録有形文化財の森本慶三記念館が隣接する絶好のロケーション。ホテルの跡地を生かした約4200㎡の敷地約3分の1には、青々とした天然芝の空間が広がっている。まちの中心部に、まさにぽっかりと現れたような、贅沢な「原っぱ」。そこには、津山市中心市街地活性化にかける人々の熱い思いがあった。

○人をつくるまちをつくる

「ホテル移転後にできた大きな空間をどうするか。私が妄想していたのは、人づくりの場にしたい、ということでした。この場所は、津山の人



阿部民子 text by Tamiko Abe

Illustration by Shigeyuki Sakata

0年に市と「まちづくり連携協定」を締結。城下地区のまちづくりビジョン策定をはじめ、まちづくりに関する多面的なコーディネート支援を続けてきた。この4年間には、国立科学博物館と連携した勉強会や市内外のプレイヤーと連携したマルシェや各種イベントなど、官民連携のさまざまな社会実験を展開。市民が望む広場の在り方や使い方を市とともに模索してきた。

津山のまちづくりを支援するURの土屋慎^{ただし}は「今までのまちづくりは、行政が都市計画をつくり、それに沿って実現していく形が主流でした。この広場も、通常に設計をして整備をすれば、たぶん1年くらいで完成するでしょう。しかし、市さんは地元の方の意見を取り入れ、さまざまな実証実験での活動や交流を積み上げ、結果として市民活動の核となるよう、あえて多目的に使える『何もない原っぱ』をつくった。その積み上げ方が津山らしいし、新しいと思っています」と振り返る。

森本慶三記念館の館長で、森本慶三氏の孫である森本信一氏は「城下

津山城跡のお膝元に誕生した新たな交流拠点の「原っぱ」

「城下スクエア」
岡山県津山市 城下地区
2020年●令和2年～

地区は、重要伝統的建造物群保存地区に認定された城東と城西地区にやや押され気味で、空き店舗や空き家も目立っています。城下スクエアの完成によって城下地区と津山市の中心市街地活性化が進むのを願っていますし、そのための協力は惜しみません」と力を込めます。

○高校生が活躍



上／地元高校生たちが展示した写真を解説してくれる。
右／森本慶三記念館に隣接する芝生を敷き詰めた広場の後ろには津山城跡が見られる。

めには、有効に活用する担い手が不可欠だ。その強力な一翼を担うのが、津山市内の高校に在籍する生徒で組織された課外活動「つやま城下ハイスクール」だ。これまでも、「城下スクエア」を舞台に、さまざまなチャレンジショップやワークショップなどを展開。11月16日には、岡山県主催の国際芸術祭「森の芸術祭 晴れの国・岡山」と連携した写真展を開催。みずみずしい感性で学校生活や通学路などの日常を切り取り、訪れた人の感動を呼んだ。参加した高校生たちも「津山の知らない面を見ることができて、楽しかった」「地域の方々など、新たな人間関係が生まれました」「今まで他の学校に知り合いがいなかったけど、活動を通じてOB、OGや他校の友人などへと交流が広がったのがうれしい」と笑顔で語る。

「つやま城下ハイスクールの活動を通して、若者どうしの輪が広がるのがあるがたい」と、生徒が参加する津山商業高等学校の片岡和昌指導教諭。世話役は「城下スクエアでの実証実験に参加させていただくこと

で、若者の活動が次のまちづくりにつながる形が着実に生まれています。多くの地方都市と同様、津山でも『18歳の崖』と呼ばれる若者の人口流出が課題となっていますが、この活動を通して将来津山に帰ってきたいという子がふえるなど、明るい兆しも見え始めています」と話す。

「今後も、URさんと連携して実証実験を積み重ね、この動きを中心市街地まで広げていきたい。特に期限は設けず、どんどん進化し変化を続ける、まさにサグラダ・ファミリアのようなまちづくりを目指したい」と小須田次長。

奇しくも、森本慶三記念館の時計塔がこのたび改修され、動きを止めていた時計が再び動き始めた。開館から約90年を経た森本慶三記念館、築城400年を超える津山城跡に見守られながら、「城下スクエア」もまた、津山の未来に向けて新たな時を刻み始めた。

街に、ルネサンス



〔企画制作〕新潮社